



平家物語 三

U 5
1760
1





伊野門
號 1760
卷 1-12

平家物語卷第三

成親卿北方北山御坐事

坂東大又親信事

丹波少將被召取事

入道相國可押寄院御取事

小松殿被諫父事

幽王被討事

西光法師被刎首事

人志中なるいふ事わけていりて世後やらんか
るははらんまてと立たのる世後へ水将殿と
しあなまうくうんちりみか光され世後つ
也てそ取つ事と後と事起わも中わひん
あき程れも小成て強うま縁方中とわ
心をめてあふれいふはわん文我と一野
乃病と消せんも一う本わられげさそく起り
とたのハうりはるこれわのーさよとて好

まらひくち起れしと行もとりり也とて小
法んまの来じふと中ちれんわて馳
とわん事とさすうなるんはと海わんわ
そとらあの人とてお行わと起とさ
ささなり人ともやわりの世といはくさ
てゆともなく御わいさす半ういみれんは
くへは金のみめてゆやんとちりれは小
とと車れ肉のりのさまを大交との

おとすちり死ねるは人々物をふたたく
いふす門前せざるものもとらをよれてさう
眼目まてとわりのほる小敷のるりまらわら
こそくれく道盛共必裏れとつりぬれぬ
りし事わらわれぬ道は山方草にはふたらの
おとわりのこお娘あてましくけをさうん
ゆん口院の御乳母誦人として沙身ちん人
りりわらわれざるものなりけるういぬわ

御此下らうなるを御方ちりくはら
る事をとれわらとて養子しとてま
せけるを法皇濟すおかりりして十思を
しりたまふていんをくみりりる候を
二條院御位に時ぬれでいぬんとして思ふ
御書でいふふれり志りくぬせうく道中
おれとも兵法皇ではすてまいせてまいぬ
金記く御志にわかりぬれん肉く法入り

いひ合られざるよ女院乃たねしあす此ら
もをされたゆゆれやも力あよすしよと
しられし程小作志わん上た田へ海し
せ終つはあこくちる人しと許しられは
法皇乃御本で近おく内裏へましり行り
くわり道く思のしよし終る也とら海あ
て御あらしうしきいあくあし架りりた後
乃御志をせ終るは事とけ人れ

中りなりとて又三位殿とく重三人志は
あし若家もき里へお終へあてはし
わしあしあしといはれん中されるあし
圖説よ海しつ比しと思はりハるあし
あしよまわお強いぬもなとしりなる
はなうあしはし小許しをましとれと
目よりへてをこくあし強ん力及て終
ぬ又十六歳より内へしり行て中二ひ

十九日申言る由し御門より世孫のまゝ
同日月より行らせ孫ある御書より世孫のまゝ
あつらんまゝのまゝ御書より世孫のまゝ
多れしうらまぬ式に御書より世孫のまゝ
ふとあり流るりまゝとたわす井中より世孫
とも御書より世孫のまゝ御書より世孫のまゝ
乞ふしはあつらん御書より世孫のまゝ
こゝろありまゝの御書より世孫のまゝ

くすむせうありまゝ新大納言のまゝ
流るり御書より世孫のまゝ御書より世孫のまゝ
れよありまゝの御書より世孫のまゝ
しうありまゝの御書より世孫のまゝ
なるまゝあり御書より世孫のまゝ
小大納言のまゝ御書より世孫のまゝ
中よりありまゝの御書より世孫のまゝ
行ておし一月よりくすむせうのまゝ

親印仲法門の寸九此記亭を磨て徒移
取ハ法印此印事成を念起しし中ふれり
その丁卯前小大納言乃局三条此局と
ふ婦し升し行ある也局也り大納言此
めらさしわあふれんけ人くたふれるは
皇入ましまし婦んわさしは御あてをわ
能んすしんとさあしおのれける小大納言
此而くしりて中ふれるハおしちあく印

幸をあしましうせゆふじする小家童子う孫
丁卯木ほくゆりの三條も大納言とあるしよ
不能免ゆゆをも内中ふれけるをさてうら
中ふれし御し中ふれりは法印とさしうと沙
めん何と伴此あり斗るハ沙幸めんよ法印
てもさみくさしんものハ減ふさるへしす
柀熟人うましつ坊よりし今ましり中さめ
わさししものう二条院もめらさしう法

まひけるははてはかやとあく前たはは
小法會入を修行處さうし作わて今は
めんかくも色さふ田地あくおぼゆるり
海くお祿をもら給へるしを因わひおま
へてくよこいさうよえうし并修行へとが
川よりく川らんと通ぬれはもる人
あるはいふ中中もわつ兒人乃は四よ八雲并
此月法音かると忘る祿をそとえぬなりあ

乃おかくく名神ある光と物すは海く
うらみ修行へとあしらうともあいつく
也うら中斗あつてなれとも大納言思
く祿をうらはさるありそおるとそ
やうもあ人の修行のぬはたよとちん
く世居ともてたのそと車ておのちもく
る一修行へくものしとへちあとい
いさうせなもくつたすおけのせなて

改よりりそのち志りては引くことあり
治ひよりれとてすすふ男女乃あり并
あれを迎付行くとるものらありたり
いふ漢くす御子とあまこりてきふあれは
目か流中らいとこり人こりやむある
いずはわる物思ふあれあるとこり人交
先世れむく并とて是てよもれ後とて
よりり及大納言目こり漢くすたれれ斗
書は斗ある

たれこ六飛のむかへせよもふんむ目新とてぬ世と
取もやうく昭れん大納言とて取夫とる
今より張るわんは世り思とて事ここと

いひをうん小方小さいものもいひ成ぬらん
わをれく玄徳で今一へいせんや師家
見行死めん事な力及びぬ事あれ申
こつたふおるこそよみり志さつりあれ
おろしはひきてさあくとお記行もこと
りりあま今秋はりれ命あれ今や
詩行りふおれも明く小成にたり大徳
後ハふと升とこそつるふいふ今またハ

さうお記やらんを御命乃毎とら終らん
もるやこそお士申を悦めハ

坂東太史親信事

は大徳云ハた方たのまなく恩慮が死ん志
うる人よく人乃時中あぬ人又事と
か危り見終りするをいれ小う死んあ
んりあまもすも物のもいひすも事
わちたり後白河院の迎習者よ坊門中徳云

ちのやいふくましく父を察る又後補
胡長じう一れお災あまう一時代の國へ下
されしふまうけられうりる子ありまはし
御く志給ひうりたれん実名り一坂東又
中そやけの院よまゆひ新者れん吾藩
依よあられよ多利又坂東を藩作あしや
るをゆきなくかいたる事よ思入れうり
ける程り一新大納公法皇乃御家よゆりれ

ける多や親伝坂東よあふまうりあ縁と
ゆられうりたれんやわあは中判の事とせ
繩目志心草ころおほくくとむをせら
まうりたれん成親卿おが事一記すこ
あうりてせさめん一て又物と乃海公うり
うり人々わまさゆりれ多り梅家使大納公入
道資賢とゆりれけるのりよれまひあるハ
吾藩作ハゆきむをハさうりけるよゆりれ

この外はよろよろなりつと申すもこれほど
うやむやと申すハ新大納言いまだこの位もあさく
殿上人少く哉後仲おと申す母志のよすめ
志いづてまをいせおわり馬帽子れいさめく
いふをいせさ歸く六うう乃むまやのなよ
い久られうり一事で思もくさハおれ是
うととハをいせしれうりう架

丹波少将被召取事

新大納言ちやく子たんとおたりはは
やう一院御前よ上補さういささお
られぬりとあふ大納言の御後なりはは
侍一人院御前へ馳り来て大納言後へお八條
よりいさめられ行ぬ夕うり夫もあつと
さあ一人公達みなめえれをせ行屋と
所つと申す申されんこおいふとあされ行
く物とおはえ娘ハさうりなりははと事

相志をいふるははせ行ぬやらんとする
と乃門上院の宰相とも懇行あるははせ
やうそい相成ともありつういあり具て
来事と八條より中へあれいといふて
後へいといある事ありわすまうといあり
うありとやういある事ありわすまうといあり
すうとい先行て院御前よりいあるははせ
いふ世成であるかしてか白膳中よりいあり

よくい世間物さういとい新つ道八例志心の
大衆乃いあるやんといふ思ひていふ身の上
いふ世成であるかしてか白膳中よりいあり
まいせといふ今いありいといふいあり
いふ世成であるかしてか白膳中よりいあり
のいふいふいふいふいふいふいふいふ
世成であるかしてか白膳中よりいあり
かういふいふいふいふいふいふいふいふ

よまより入る十二流中一もたぬお取合の御前
にうて前寄をよのふぬ卯の一目も御前へは
らぬ中よゆはうわはるよのせを是れはいせ
見よふとく朝夕よ龍顔よりよせにて朝
恩よのよあさみちてこそわく昔よゆつる
よ今はいちるわはれん倉よよとくもらん大酒
言よ今取死さいよゆり久よとゆし
為うよは成よあん上よ成経の才も因縁

しうめい道よんすまめいひつげてあり
よぬの神もあやうらんありあやもこれ秋も志
かりあもあふ御前へはゆりてはよとせ
ふれふれえ法皇よたねよよあやうの御前も
あう同よ量よ一筆れよれよあるよよあはれ
よあさまよ今日相國の使のわりはる
よゆりてよぬよあゆりよゆりよゆりよ
へと御前よあゆりよれよ世よあゆりよ

とていふ一度もさへいふまい路ん也
かゝるは道は御氣入海いふいふれを
渾^まやまうむことなり龍顔あり御海のも
せさわぬ御換りありおぼも又中御ありき
流方もなり神をぬりてあてり
るにおぬ見はなれ晴行倉る女やうら
門まそら歌ふ見をうりて涙のおぼれ
名あてなしまゆん志なりぬたなりとてなりの

とる葉は雪もほりふ御らんりては
後で湖のこせ行て又所流んを思事
やあむあむすやわられある末代り
かうられか流りのやめらん支玉はれは
ぬるもさうらさうれと流れぬる
ちくりははのりる人にも人志上とありふ
倉見りあすいなる事あらんも
中やと記つるはしりす行へるをとお

乃小方ハわづれ梅ひく物とおぼえぬてい
あころちうしくけるちうく産一歩行足記
人にくあまよしあく月ころもあやに待つる
りあるわさま一たもせは行へいとも
あ一歩の行おおけさよとあくるは
さこねよ小方志なき一たせんはよい
路ん方なくとあやううあふれば人か
おこつんを見せさていふもなうあや

おとりれけるもせあてのももとおぼえさ
さ一たれ六条とておし一たつ記をぬれ
乳母志女房わらわれば事とするは
まろひくもつえおるももたの光あ
らのゆふま一たおあめあまは
せこのひのめまもくもさ一あな
思ふあま一なるをれさしこ船は志
さあつめく福をなかり夏乃あつた

あふさ海也と名むししてこもやまおん
さあとして宰相お行へ八車よ宗具一とく
おおもお行ぬを死人とせやるとおもてやうり
尼をうりて泣わひらり佛え平治よあひの
る平家志んたのこころんハわき中と
思歎えざうとほらるる門脇宰相ハあも
うしれあはゆるじこんよあむ歎をされ
あまは八乗ちく御ありをくれさきんせれ

や又可めは或士きうまんしていくあ方
いふもをきといたをうりあもあ
りなりおおハ気とん行りハ法宗て
大納言及此御事とおんとも行り
宰相車では門外よやうりて素因と
強へん内へた金道行まうとせわはは
物をハその色ちん尼佛きおまうと
て宰相ハうり内へ入行ぬんもさう

乃わきよき来く居廻てまかり戸あねた梁
うりつるさい相ハ入行ぬいとつがさくぬし
宰相今く居行へはたわし一内徳あり後
本士中よのいそあ記あ合る氣色はよあひ
あし一ありとるさしとるそく人見えんふ
入らんとのさまひふれとも入道あわひ行ハ
うりあれた孝貞とよひおして宰相
ふれけるいしな記よのふさうしとあわんや

今うら思あし務られてくやしとくもこひ
らと成程し一わひくせさもくんとあいつく
とあさえあう終人御やよあんわひ志みあ力
によふが終事あくじうんよあほえんとあうく
産す人あまのあくとくといふあやん月あ
なやとんはるしけ歌うらと人あおあ
とあし思さ記よ命も絶人あんすそと終
くやとあひとたけあれあしとあ成程

と事相がむさうかいらげと思行てを
しせしこのまひるるハお極乃仰はたふ
うんぞわさひて中ハそのぞおれうあれと
心仲よあらん程の事と強うんもくらお
しうれん中ぞお貞今一度くせよ
保元平治支度乃合戦也と身で控え御
命よおほりなるとぞ思ふことし
後とわらぬ風とはまけう後うんとあ

思ふなり盛ろう今ハ年ありてんやも
けり者ともあまことん御大事と何じ
と記ハなり中一の首志此おの目とあえん
き乃り盛うたのえも程ハはやくあ
先されとさうりける成程を志はらう
わらうんも中をわがほらあくはけり
れゆらさ終乃あうんハすては二分の若
お月一人あうんも程うとらわらうん

おのれをもく世あてとあふく世に
せりあつと又いはるれとあふく世
そ今身のいゆと行ても家入道りそ
所山もよみりわく後生善提此勅を江
倉ししち記受せ乃ししり世よわれ
おろきもわれのそしりかよ録なそら
尼をわれししと世のついでとあふく
たり入らんよとれとまらん孝貞ふく

ち記事しれも思くけしとく入道
後よしれん物よつぬくかそ又あ
乃しまりす孝貞中ちるの事お後か
りしとあつるは氣文よりそせ行あり
く御斗やあつらゆらんとしるれんそ
入道のこまひけるはえ所も家あるそ
治れんなるそあつらふいぬかか
程よしとみられましと

大納言殿、内大臣志、やむく、うれ、き、い、れ
と、今、夜、た、の、い、行、わ、る、や、ん、と、い、う、時、に、
心、を、も、と、思、は、な、い、と、い、う、の、こ、し、ひ、く、れ、な、お、お
ま、の、母、手、で、今、を、悦、ば、り、り、と、い、う、お、お、
か、り、と、い、う、の、お、お、い、と、い、う、お、お、
さ、ん、行、よ、と、い、う、宰相、又、い、う、ん、お、お、
ま、の、お、お、今、行、く、と、い、う、お、お、
う、と、い、う、お、お、と、い、う、の、い、う、と、い、う、

く、才、ふ、み、く、う、流、く、お、り、よ、お、お、
思、お、父、子、乃、お、ら、う、と、い、う、お、お、
と、い、う、の、お、お、お、お、と、い、う、お、お、
お、お、の、お、お、お、お、と、い、う、お、お、
宰相、の、お、お、お、お、と、い、う、お、お、
と、い、う、お、お、と、い、う、お、お、
い、う、お、お、と、い、う、お、お、
い、う、お、お、と、い、う、お、お、

いよいよ此縁を起すべくすす
ふいふいまま命をまゝいふいふ
くたやうんとぬい思ふれはふお
及も海を舟とす起よ人うとむいて
中うりくれん車よおむいてまよ
とて又都くふた起舟ありのらふ
改ましくうれん死くふんを海う
よもゆえて悦ばせしめ公れありは

宰相と申ハ大段入道志さいわひの弟めく
所海と申せとあら行りすうれを六
惣門の内り屋を立ちし人らふり
兵名よ門脇幸おと中らるる海入道八
よまう一門脇と申せと成つま
都志おとらわめ守てをおりける

入道相國可相壽院御前事

入道と申候よ人々わまういしめを

これとて從つて思ひれも道にまゝ思はば
とむ人もく鳥羽後よとてあまもくつら
今と仰事ある志もくんと思ふらつたれどもあ
わららのありまのいふれよとらふ物ある
くらいとわくしとていふれよとせめて
そのわくまも思ふとていふれよとせめて
と神降の次よまといふとてあてまうけ
るもくらつたれはむる巻くもくは乃年か

こつた孫の枕でとていふれよとせめてたれ
よとていふて中門の廊よはとていふれよ
そのまゝに記せよとていふれよとせめて
後守貞能ハ本蘭^地志^地志^地よといふれよ
よといふて御氣よといふれよといふれよ
まひけるも貞能はとていふれよといふれよ
するはいつとも一年保元の逆乱乃は平
右馬助忠公をりめとていふれよといふれよ

中本とて院の御方よまじりや一宮は
清も八坂刑部殿に養老にくりつて
清の八坂とて思ふあらまじりや
かとも故院の御遺誠より記さく御方よ
う記さくもつるもさし一志を公なり記
平治志逆乱の母信頼よりやまじりや
通命をさしみてはあうまじりや
命を捨て函後と遊ぶとして天下を
しむ

我乃此らつ孫宗ありて誠よつるま
君志御事ありて誠よつるま
なると事よひ人いふや中と浄海の源
いふと浄海行念ふと浄海と事よ
う浄海よつるまのとははいま
いまあらうまじりや大御元
さふはる世行てなまじりや一門と
さるる念より院中これ浄海と事
よ

はまの御供は斗うせすたわらるるや
わらぬすへ入通めんぞんよるへや
小面を下賜中よのいふ事なまわらば
追討乃院室下れぬ中おがゆるそ胡敵
と成めんのちへ梅よ登あめゆし世と
めん程伝洞を鳥羽志小辰へうけし
解らす八洲幸せしへりしも
その儀あらし小面れものやの仲よ

一すらしんする者もわらぬはゆめ
侍もりし用意せよしゆれぬそ
海院方此文は思ふつらうり
出せる小つらなをよそし
鳥羽殿への御幸とくきあえ
んは皇と為國のこへあ
らなをせよれ斗る

小松殿被諫文事

之馬列宿盛國はさきさきで見たまひて小松殿
へ馳よき大長殿よりけりハ世ハ今朝より
比入道殿すそ小御正殿ありぬ侍中も
みれおまひは信守殿へおまひぬ高羽殿へ
の御事とハけりえとも内ハ西國より
御事さきさきもさきさきもさきさきも
承へいふは御前へハ今も御事ハ
やんといふははたわるともさきさきハ内大臣

大ふさハれりいそさきさきもさきさきと
おのともさきさき入道の氣なる物さきさき
さきさきもさきさきとさきさきもさきさき
比馳來そのはたわりさきさきとさきさき
及びすハさきさきとさきさきとさきさきと
あれりり車の麻りさきさきとさきさきと
身二三人さきさきと今朝さきさきと
さきさきとさきさきとさきさきとさきさきと

今く居るれ道一門を卿相雲家教十
人思これ世為り一々ののふりいきて中門
乃廊より二の被忌より清府法司法國の
受領なり八極は指少きそはが少いそと
なみわつるもさふふにいとあてふれらる
祀とちあつくわやとをいひさ志上よとて
きくいまひ物んするふいとくつりくるり
内大臣鳥帽子世衣あてこつねのりん成

そてふの足入道より事の所あり居る道
ある入道ハとを中をくつり足行て少
我ゆめ小成く何乃は内府をせと學する
棟よあるまうりての得するふ思われそあ
は内大臣の内女は又戒を指外よは非常と
みうす仁義礼智信とてよくを雙乃
賢人になくまうりてのれとみなうもすあ
は婆よんうきとてそわひひりん事面

ふゆや思ひぬるむ隣子とせしむるそ
股巻乃うへあそけんの衣と引きてむれ
いこれあまおまゝの道てきらくせし
見えける浅きとんとさうりよむ祿と
ちやくとせられくる内大臣の衣大納
宗盛卿より上よたたく忌をたせれる
檜扇中末よひつさてはうまひ内大
臣と志りし物もたすまひと入道殿も又

若も一修行す良久わく入道のまひ
親お杯は石の事西光法師よとせし
わの島へ成親父子むじらん乃うとせん
ものうへあそけんひるそ大宮迎來り
しとせし迎習者中むたれよとせし
さういづく海くの事をすし先中なる
所あらくしとせし君あそけりし修行一定
天下此類富家志大事門もせし修行中

たふゆる間法を乞へじうまうせく行き
よとて終まひせんを存するわひいひ
名もせんともく約をほるふいなるちの
ゆ大方の淨海う思とたの事法をこれ
つりつこよ遠うんすこも遠恨はたえ
ふとのこまへ内府畏永くぬとけつあ
めく雙眼くをくくくく後とたう行
入道わさうー中ありてこひふとるこ

あへ内府由衣志御神あく後とせし乃
こいこ中うれけるはは法とわうありゆ
運れすてふす忠にありゆとわひてふえ
志後乃あやまひ先あふれりぬい子
中とけ御染て見まひせしうあまうつ
ともたやういねさすり昔胡島部粟散
乃揚とちあう天照大神れ御子孫國法
わさうーてわすれぬのみとの御

末朝政を典法しるを以て未だ没大位よのふ
世流へ甲しうをよるう事板わたりし
中とあかえす魂伸お家の法身ゆなり
かこくはるゝあつとわたりあつとあつと
世諸佛の解脱幢相の法衣をぬこす
うらま地り甲胃法帯しはしはるんす
肉もはすて小破戒無漸乃暴すも縁起行
のこよわすすおは又仁美礼智信此法

あもろしきゆめらん中しそわえん
盛つこり御意よ遠り記あり法せわう
ありよよハすくよ不存此仁りもあま
ゆめれまうよらんよていてお思事と心
中よあしらんらんらとてあつとあつと
つこよちひうく屋しがうりれなうとん
らく御心とあつとあつとあつとあつと
中法と具よこりあつとあつとあつとあつと

又最後此中状少くもうまいは本院系の際
あふ事しむきとの本院系あるうひと
主盛小澤合られて中こあら志一隊せ
きこしめされたり多ふのせし所なり
さへしとくわひく人ものれむほん志とも
わらりしをれんぬるうへなるもとら
んまいつせ行愈又まうしとくそれん
に應よ
にわたりしとく事ハよとくしとく
迎智此人

くれ中すめまいしせひふそとく
あふもゆらあきとい又君此御法
うく院宣とりてむほんの事
ゆいふこと志なくはひつ事
んぞ我のいへ上右を思やり
貞もりの将門とらうりしと
れし事受領せはこり
う十二のまてうりて貞
仁宗仁とらる

仰身と懐て恩のほをあふいあくをも
此忠良を存し民のふあは倍々撫育乃
此わひまんとしうしうせんいそい
させ行てせいむよ私わしうかりあさ
詔天云神の擁護済くも神明弘臨乃
御如護志うありたりて恩此はすはり
引く道長くは化よ滅亡し高遠
かつらきいふんし海志相記し
り

百天此嵐やまんも孝とせうんりも
あながれ倉く大方に誌経此説相不
少して内外存念各別ありとんも
能く心地観經第二卷小より八世よ四恩
わり一よ八天地恩二よ八國王恩三よ八師長
父母恩四よ八衆生恩とありを
をりて人倫中し知る所りて鬼畜
中その中よみふをり此八恩なり

わまも保く天下五ふよ何うすといふ事か
率ふれひん五長よ何うすといふ事か
祝申國との鬼は一門よふふかあり日本
おふれふふ十六ヶ國うる錢三十余ヶ國
ハ一門志を國あくまつりふと錢執行を此
うたは蘭田島都門の不振ありは一門志願
息よかこる事ハ依は將軍やとてはは
首も今もそきりてすれはかのえい路に

水りみと洗きやうふよ蕨をやりける
賢人も勅命此の道かう記礼儀とは好
とらうう事強けれ系と仰先禮をうんじ
天と乃仰苗衣崗高原親王御後亂世
あうら仲右より下は下は宿達もうらふら
りけふ下國を愛領とてあもゆふれす
してゆけふ小政刑部卿及海部國務乃
海鳥羽院御願得長為院造進此勅賞

少くも久絶ありし内昇及てゆるされ
一はも可く入らひの成りしけりしを承
まひふいふんや御方ハすては評記此例を
すうりし大政大臣の位きうあをせ行ひ
御東又大臣大將りいしまるは詔を登
ゆり能入思暗の力をせりて蓮符槐門乃
位よあつるも希代志を懸よあすや今
守りし大朝恩とあつる君をわたりしま

らせ行つん奉天照大神正八幡文日月
星宿賢宰地神よあつる御評や作
魚記をいし天れせあてあて朝敵とれ
目行魚一羽てことなるあつはらうは
百目をくわとひとあすしう中は
これあつる次をりて奇怪ありとあ
あつるもハをいしあつるもあつる
御評にまひあつるもあつるもあつる

ちれて仰答らるる人々か極よりとされぬ
事と申し又君いふ事と申しと申しと
いふ事も將あるの巻よりと申しと申しと
事下れ事下りてはふれといふ事成りては
りん上におちりて事のおおとらん
申させ行へといふ事とらんらんらん
は言とといふ事とらんらんらんらんらん
しやともおちえらんといふ事とらんらんらん

以王命待父命以家事不待王事以王
事待家事也といふ事とらんらんらんらん
するふらんといふ事とらんらんらんらん
はあり道理と待事とらんらんらんらん
は理よはのらんやといふ事とらんらんらん
らんらんらんらんらんらんらんらんらん
はらんらんらんらんらんらんらんらんらん
申とらんらんらんらんらんらんらんらん

中へ盛姫て六位叙子せんせし今三
志す志よはくちなるし胡恩をかうも
男よといてはすこあるそふありはた
を思へん子顯百をれむおも世乃の
記もとうんすきハ一入再入志ぬに
うん然きは盛志志御方へまわ
らく侍二三百路のうらひゆんその中ふ
族よかり男もとうんとかもふ得こ

百人おなりのゆさうん乞らせし
院乃御方へ下りて樂我らわの法
大奉ふくしんすあ乞とりて昔
わんすふ保元運礼乃母六條判友
新院の御方よゆ子息下つぎ
ん因裏ふん台我もかりて大炊
ちやうのふあり乃鹿よかり後ハ
わされ國へは下向右符なる

うを行てのら大將軍をううになりて子
りくうし船も中へ降人よあり平を乞て
むくうありとれととら度胡敵は大方んあり
とく此輩よこしゆりふれはうしやも力
たよす人年よあらんありやと集薩大
海よ引出て又ありへとる孫り一奉た
なり勅定中申なりと悪くやと道乃お
うりららありん事とれとことなりしあ

と度若うらう了賜ましくら故保元共例
り但くを盛又道乃その一あありらん
まらんや海よりお種てかう後らんあり
記るや若れ沖うあよ忠をいさうんや
すまこと速慮八百乃項なをうさする又れ
恩とてらち地よりと流く不存とつらう
う後いさうまきらやふけうの輩とのの
礼んとすれと又若れはうあふ不忠れ道に

中あめりぬく——きこあうすやいふもは長
長うすきわゆる次文たるもさういふ
も子ら子きくをらる人あうすきこひ
うきこひもわくはまふくも末代よきと
うあうわゆるうん先をみるを盛うをみ
程そらわゆる人うれん中うくるも
ふかき水水門あくして御院系あるは
うら先を盛うわうへ城めさるうぬは防

心院中をて守護すく寸又御法生と江
魚く次中うく家くくきく首とめさる
へ文也こまかぬ——わい場うくく
御運一定すきふなりてくやたゆえん
なかの人を運乃もきよのそくはとわさ
むらも成思うきつるもく作をれ老
子志くはくも思合られく功成名遂退
身遊後郎不遇害中もく彼勲蕭荷

人知とふるも傍軍よめえきるるりよ
て宿大相國よいりるも劔をさいり皆とし
記あし殿上よのりるもすてゆるされきり
幾とく後とて勸慰り持むし事ありし
く高祖来くわりのいりて先て廷尉ふ
くしてぬくつみきり幾論語も文
小邦無道則留且貴恥也と云文あり
やうれ先縦をわひわし留人小と留留と

いひ朝恩といひ重職といひ一とありす
いあく年久しきありしと留所うんの
はるん中と非可堅留貴乃家祿法を
せらば從再實の本そ乃根如湯とてい
心をくしりあやえ人いはきくあて
みよする世と居へてあていうんくわへせ
と縁られゆへ侍一人よ作つてくさ
いはふよいし法てわい屋と縁らるん

事はよふ危す死事少くもせんすれき
そこの原いりやう行やこく事衣をぬき
しられ申よりたうわみとれ出てもかうら
わみくもあくとるに陳中もれれ一門
忠人くもりりもあく信也よもあま
いの神ぞもあうもれも入道も忘本あり
海に原理は決するてあまもく信守候
るれあうりゆふ陽子のむくへも入り入る

わはは子のむくもあうもれも入道も忘本あり
海に原理は決するてあまもく信守候
るれあうりゆふ陽子のむくへも入り入る
わはは子のむくもあうもれも入道も忘本あり
海に原理は決するてあまもく信守候
るれあうりゆふ陽子のむくへも入り入る
わはは子のむくもあうもれも入道も忘本あり
海に原理は決するてあまもく信守候
るれあうりゆふ陽子のむくへも入り入る
わはは子のむくもあうもれも入道も忘本あり
海に原理は決するてあまもく信守候
るれあうりゆふ陽子のむくへも入り入る

ふれしあわかまりく志とてかほととちり行
つ車走ららよもういせられうあなれのみ
れをりしをせてむく大地のうりい世宗ふ
らうのふやひらうりいよふて白星れふと
春迎やいふ報色のくひようけをせてあま
乃右大お宗盛れくららけ忠るふ黄く
まんの鞆をふて中移りい入るをりな
くりて衆行るとい入るお立行ゆとちり

おへ文信よりふわひてのいまひけるハを盛
りやつるもへとろくおつるすや後を
院宗の御儀とていハを盛わうへとん
福うれんとそんく後ハとあがゆらいら
よげさうりもあくおなハけんまそと陳
さうや中なつまこと気折のわらふ後い
わりくよんはる留ねする角わて後つる也
らハをむら前わらうす頭とあるふはよ

中つ道ハ世の角せう好せぬ世今もくこ
も治おされぬといふも人交りや今日あり
坂ハ中遠もる重盛とまきらわとたのん
人交りはさうして小松へまいれとせり
ゆらう此あありとせんとしするそと
まひすてく仰るそとせつといふ小松坂
へ改行ぬとせりて西ハ條よありあり
ゆも入道後よかくゆとせりて我ら小と

う馳あるかりきあういさり行ぬ人を
ある作のくると刻の玉細ありとせり
黎明よとれん法中のか白門西京あり
伏見宇治界の屋浪羽東殿醍醐小栗梅
目野勅院守大原志津原小あまて我を
解くゆとれわのまりとれん西ハ条小は
昔女房古后公自筆執り我わとせり
けるら兼携人^{八平}なるもの一人もせりける

入道後人やわろふや愛まこられん貞徳様とて
肥後守はとまゝするゆゑに誰とある貞徳
あつてハ一人もいふもはあ少くも誰とある小松
後へみままつりて貞徳とあハ一人もあ
そのまゝ中々れは入道後ゆるめくもそ
くしとあく見行へるあふと侍よ六人一人
もあつてあやわろふこあやわろふやあ乃
りれここのあんどうのをたわりた行を
す

やと人一人と見ふつりたりこあいふ内府よ
申遠てハ所はとせりつらまといくわらんす
あかあうかあわりけるものまもてうせふ
死てよ小公はすき小えけ少く後考ぬさ
ときく掩行道とてけんの衣よあ家法
うらけくいとつとあこら念念殊うわく
そかりくる貞徳よれこあひあるハい
世間の極あふやわらんするそあの新れん

貞能中けるハ御子も御子よ一も一も也給人
たりふらうしくゆふ文御世望ん御仲を
あやせましくくくくくくくくくくく
ふれん入道とくそよ能いいうり入道もか
くくくおすまことの行とくふ入道乃公
弟とけまの守忠度小具是くくくくくく
まくく一騎んせまられく入り入道は人
とんつまくすめく方つたるつらとくわ

せん薩摩後くうん人内符くくくく
うり決るのうんたまじりてくくくく
つらまくとゆううんゆはくくくく
そ入道後御世望ん小色も勢もくくく
いく極少とく文も御り子孫よくくく
國よ末代よ子孫一人もあまくくく
わりくくくくも御望んくくく
心徳もくくく御方よくくく

しまいせんともく小具はめられんう今
院系わん中ゆと中ふれ多れ入道具先
てや子の薩摩殿と子の宅内府と六の所小
の通く中と人あくちしき場半也ましく
じつてなごめく見行へくしなまやめり先
しつ場うんするやんたあ行らんする換ハ
はり世中さめくあははは守と將馬
羽殿小を祀ましく留く世とさめりあじや

すきん嫡子よ換らんしうあひくれむく
子小すてらんへ朽木志枝を祀りや中
あり院系よたいては思やまありあは
以後内府存れんしうひ中ふんまきと一切背
まきまきと志守給へあふまきと中へ
倉しと乃さまふへ志まきとる薩摩
守小松殿へ馳向てはしと中ふれまきハ
小松殿神を顔りてわてんを祀く也

江行ふいふを久わての行なるいかに
少とさうふを能子なり入道友いふわら
ふわうせ行ともあふれんさういも
魚兒少くともわれとも思てかやう奉
事れりあふふ思て守護しを江ん中
すれんいふとさういもいふ思て
御方中てをて江行すしとわらぬな
道江神といふわらぬ人作江院

系わらん支う一江に建つていふ江
中遠もり院と守護しまいとん中
ハ中つ道江院系わらん一江に建つていふ
つんよといていふ江とて遠まいつる
或やう作は江る系わらん一江に建つていふ
事たつてわんもるよ又思ていふ江
ういて思て換もらん事ハ思ていふ江
高もわうり又をすて思て江院に

まじりたり又不存志を登深源一は
論君志所方へも余危くは父志命
よ意順まし一は一毎くは一は成三あり
心野よまし一は一は板も善徳の法と先あり
外他事ゆゆ一と一は所也事一は一は乳
くも一は摩吉弛ゆくは一は一は一は一は
淡く入る後乞とすてふ一は一は一は一は
くも一は一は一は一は一は一は一は一は一は

しくけりともみそ先れ神を世とありて
くも一は一は一は一は一は一は一は一は一は
まじりたり又不存志を登深源一は
論君志所方へも余危くは父志命
よ意順まし一は一は一は一は一は一は一は一は一は

幽王被討事

小松及ハリツリ集る結こも一は一は一は一は
深られけるハ一は一は一は一は一は一は一は一は
まじりたり又不存志を登深源一は
論君志所方へも余危くは父志命
よ意順まし一は一は一は一は一は一は一は一は一は

故よハ友兵と云り一わりのんそてたはあ
よハ花火とわくるまはだいわり烽火とん
我胡山とよふ火は野りりといひくま
記号よ火とよふと事わり記号記
幽王胡歌と亡うんやと烽火右鼓とよ
このわり烽火右鼓とハるこれけよ火を
入る天を翔あする羽あり乞もれつら
をよまつんをわりのじりこりこ

よは花火と揚るとまやう一はまい
くくやと太鼓翔あかき天を
翔羽ありりこり一はまい
まいこお記よりいふるいこり乃と
幽王悦とすよは花と物乃とまい
まみとやとるいふるこり乃と
をよまつんするんりこよハ花火とわく
まとんこ記ま友兵とらまこま

小舟出舟とて池系ある得なるをこれん
事ありたりとてあくや東へ渡りり東海
へ渡るあり心黒志山川とて西海へなを
ゆくのあり八まてしゆらと後よりあく
するよしすく小渡こありその後ハ公公即
て池系するゆかり勢すうくあをあん
りちるをて秦帝公といふ大しう軍
とりて張氏あしり幽王れ内裏へと

と筋うり大主人こおとら死てたれ和采
よ家火と揚としこもあふれとるを例
忠信れ物のこまいりいふふと思ふれ
を此系りもせうりつるをこれ王交
へみこき入く幽王とらりそのあをせしと
りり系くして後ハ海うりしは白帆を危
こわるふ現してう筋よらり矢ああはか
るるああうりわるとこよき感別してな事

とす出はるるわいのよははるるふ母
を人とも記ふする衆と神妙あり文
のよははるるものよしは事なす
な海は海今事なれえそそ勢く出
まれくふささく事なれ自しは後と
くさくわの信くわは文よ述くわ
教をくたいて死く海く物をぬたえや
すすすすすすすすすすすすすすすす

披瀝わりのれハ二万七千三百余語とそ
ううううの柳英女をさい海いとた幽まれ
何より名付るそみんことさくむくそよ
讀わりのひよみそはものこはいまは先記
礼ふれそと當世都は六領域とさうははる
あるふつ採志女よん高そ人乃めらとさ
やうすとしぬお説わのや内大臣海と
よははるる事とそさういさうれうり

あれこゝと父志入るを諫めては留め
あふよきこゝに我身を御代はくは
ぬみほととてしつゝ父とてい
さげせんよわつた父志むらん志
や思宿るゆふよのんりやあ
長れおん志む御代はくは
君乃こゝれ忠なり父志入るは
くれゆとありける人なりは

すしつゝおれて今よはけし
志むる御代はくは
君乃こゝれ忠なり父志入るは
くれゆとありける人なりは
すしつゝおれて今よはけし
志むる御代はくは
君乃こゝれ忠なり父志入るは
くれゆとありける人なりは

成親流最事

二日成親ゆとは秋やうく暇ふふと
我よ出なましく物まいる路つりなれ
心縁せぬれこそさうりていさむと
さすやうく逐まき友人下りりて
しるをこいさぬくも中々れん
我すぢりもいぬ御車乃すこ
うさ波ようけくうらるるの場
先火白干下一人は中々く引さうな

祝志様と二度わてなる次は看者
人うそ殺害志刀そく二刀は
とくもる次は山城判友
少くもなる事は人徳と
御湯へ一行りては
いはらなるいふ
やうやう終くわ
数百騎車乃
御後よ

すれども我方懐志者一人も
ある所へ申す所もあらず
内大臣よし一度あひも
これと云ふれりす
ものともあはれ
みなくつりよし
とるふ海人
とて一度志
はるる

又鵬を以て乞も懐りよ月と君とく
わろしうあれ大細言八日月志
あはれをなす
しとて一
れあつた
とて
うれ
あはれ

もあぐそ思ひはかたれくる

極東より海船とありてそからくれをよるんぬし
鳥羽後よつたし人ほろしつらんをれ
なつる客人半くいとをみかたの便を
明すわや一れつ所の男つ所のあふく歌
まくとまこれのいよとあをれをくして
於よあそまも海船とありていんあ
なつらん海船とありていんあ

はつらんあつらんあつらんあつらん
もあつらんあつらんあつらんあつらん
都とあつらんあつらんあつらんあつらん
を国へゆつらんあつらんあつらんあつらん
せつらんあつらんあつらんあつらんあつらん
つらんあつらんあつらんあつらんあつらん
なつらんあつらんあつらんあつらんあつらん
の神とあつらんあつらんあつらんあつらん

命也と云ふんとしひ歎一もの一二百人も
わらふらんものをとせよと我わらふ海人しや
かりふものかたきとくらさくおれを海
とよしと云ふと女も死もの娘なれと云
わらふれと思はる大納言御母よわらひ給
く鳥羽殿と見わらうと古瀬邊志成士小
りこりせよと云ふはるハ云承可志少は御言
羽殿よ御母のわらひ給りすよ御母わらひ給

四條大政大臣の長はいとこの役と云ふん
せし歌花山院中納言と云ふまは御言
御くよ余と云ふは御言中納言と云ふ
くいちりり死志役よまは御言揚梅と云
わらふちの御言と云ふは御言わらひ給
御言の役と云ふは御言と云ふは御言
みわらふと群集乃法人のんをなりと云
と云ふ御言と云ふは御言秋樂のいさよ

と奏せしむるに小又六志調はかりしに
天井はよよいと云ふはのふさこも着
たれと云ふとあく文をうしあふそと
さほく筋うるとすその目位少おとす
たよと云うしとあふと云ふといふ
人少くつる筋行と筋戸をうしと下
さふしと成親畏く天井よむといふ
いふある人少くつる筋入るよと院置れ

そのじきをやるに六我の位名乃道
小治小せうありと云ふとやうと
もとせもと云ふ人といふ筋よと
大那神志は新向わりと云ふと
御持志はと人といふと云ふと
あり親しと云ふと云ふと云ふと
りしと云ふと云ふと云ふと云ふと
いふと云ふと云ふと云ふと云ふと

まともな足踏へつ保とぞほく先とて
おほく志士とせしむらひ志神とてね
しけるくまれ天主守まうてなとふそ二
丸と棟よはるしける船とく次乃る二
二十艘と記はるるわるとしふと
るおとす入屋とせしめよ大幕とまじ
て我方の海を者一人もかくて見せし
ぬつしものこのふ糸具とていつらとふ

奉もつらぬかりとらんさしと
先よのりつるおとすはくもい志渡
むやとい思ふらぬとくもくち
るるふとらとてふとらとら
死とて

檀雲同縁事

は名ハヤリとてふよハわらすしと佛
ことらは魚とてふのたハ天ちくよ唯圓上

人草人ましく死又天ちくふさう此後
あり生れ死乃りしめさく年開は此功は
むく終らるるまゝいひしつゝ明園入滅
ふまひ東洲才子唯智と申傳わり交
長老入りししとて歌よひ創
し錢るししみ我がこもいまこ今日も
廻するししめ即ししとていひしふ
斗こく同敷は此の世にいと明日もふれ
る

かほえく世れ思濟くすまひしし
来多れ初秋の中志又目乃言はふ
ふとて故上人志は事無しし
墓前よまうてく屋うくふ此業控と
らいたまひししとてまたり此面
地ししとてう言記わされよわ
唯智かりしれける八通業並後よ
十月又目よひまうししや
り

よ来くま子いふおんわい候うとてう候
教といふとわらまふ来まふまのれ
能くすかいら現くいふ人かちりひは
淨善志はあは神無草一のわらふ柴
我明よ八色蕉といふも也れ神無草の
枝よ不死散草と云ふ乃く自業と云わら
あはく火とつまふくば光よあんないよつり候
一教とわらりていふ人現も照光明と云

いふ人の扱上人いかり候志うこらなすこ
くもたう人も現現れあめり唯智とん
かんとあいいわんれよあゆえく^悲泣^涙い
^涙きうくく^涙きほとふわりあふこをかん
あんとむゆんあめりて中ふるふせ
乞をす人く名あてり父母とん教いふ
あつりる人七月まれ孟榮と云ふ草不
光明揚とく夕よ火とぬもといふの光

少くも一紀故人と見じうらうらうなる

花秋大納言事

はやしもこのころの事ある風情秋朝は
わり景祿天皇御宇に花秋大納言中
中なる人他世をいれりこのは子乃火將
中なる人とて決まるとのらるる一は
のいはもその目つらうらうの候とす
は、昔の唯智うわやとすつらうなるは

七月中乃又月れ言はふ父志は善し海
うては、やうく後世とすわらぬとす
唯智うわやとて遠へもしては善し
あよむとす本志一はわりなる小善し
は、あやむとすひつとす

玉姿あはれ我小尼坊給へ首なるは公なるは
中なる事とすは、あやむとす誠し
は、風情よ遠り守故大納言とす

おねよんくゝるふおねよんをかくす、まじ
後いままかしくじりれは比ひさうしあ
子小海あふーい戸の賢人のなるあまは
みくるふ柳もさへ法名とさうしほへん
こく青漢あふ六文のあまやまをましく
き大をんさかうして我あ仲れあをさ
うきくいすくぬらんりの父母さいー
死してさ記さんさまうんはあまの心を

やとむらさあけとえをんちりひ行ふ
乃誓よ海して天小海わてあうんちり
曾あふりふ余還あといふ山わりひあ
志頂よ高部中いふあわりそれあをて
まう記くーらと磨くまをいふあわり
けさーへふりて皮高部あ松とあま
りり一丈二尺たうさ又又の寸よ磨くれ
さへ美言秘苑威勢移極と名付つらあ

のすみよきふれうり入さき月れ新うつる
母れ妻の根うて別一故人と急すま
へ入目れ新よ映してかたす現す中い合
ふれえ天と志神恋草とめちし種れ
母り我胡のわおのた松も乞うわし一志
ふれハもハ六又志移植よ事しと語く乞
とくしら松と名付合しとて初秋れ十四
又目の言りし一いんを清くたくれまい

わし兒も草とびすひ火をより一草ふい
じくもより一火とくしら松とよしける我
胡よけ火とくりしとじるとハびいんかん
わししとて根松とくふ名とわしと
いよ小絶す成親位者天王寺まうしてとれ
わしし一母あうれとくしとくしとわしと
と思よしとくし一我身小歎のわしはう首
たひ思ししとくしとくし

山佛因縁事

高きよきめつら仏といふとありはは
まよしは孝徳天皇以て宇佐野尾少将
志人月夜門志世所よを付なすといふ
名をうらそ後後志藤尾といふ
よといふ縁起する少将志実といふ
うのし記よりうら遠縁志重科と家
かたり英志伸れ世をれといふ

とて我りやとおのれは
ける仏士よ伸くよとて
はるま義足信をりて
うりたよや伊中あり
さるうれありて
中つら佛のみな
志者れいひ
ほや久あり

楊貴妃一絶はくと名とすらく大羅女
よらひと世にうらむる権化志深ゆ
わらうよとてよと婦んきとてと後代小
きつうくありれり絶ハあはれとておはを
作らばは美とほおんと誓ふれりり海を
あく船をよとさふくはしやのあつらふ
八絶のうらよ入絶地とほしとてとて
せ思ふ婦人よととと縁よはとらるる

いれといひ思ふ婦人絶方よ絶一美
わの時ハゆとれ歌もとてと縁よと
思はれゆとてと絶くはと絶くはと
大絶言とてと絶くはと絶くはと
大絶乃絶くはとと絶くはと

此の絶くはと絶くはと絶くはと
中らり絶くはと絶くはと絶くはと
絶くはと絶くはと絶くはと絶くはと

但獄に入念とお志まし油火う物すすい
遠縁をくたしるふ念ん人なるとお志す
けるともやと思わぬあつてうたを利
又申細言あくましくする母あつた
かひしるふ念んよ志を念えん
しる月代右束門尉政明あまへる
といと河よと念りるるふ山門願
徳のふ平野念神人事とす

より平野念神人あまへるよ
りる宿よとわさお念わうと
かのらよはらよとすみと付
あまの念ふあまの念ふ
にんしるうとつりるる念
神人山つへる念の念十二月九
日自り例念大念念念念念
と指をくちんとうへ念す

うして少留り候ふれと意の明り次を備
御門より入るる人並の門意ありたるを
もくをくならりたること縁最き此目
代まゝいこの候ふんやとていふに
はくの中より成親の海軍國へなりと
目代政明と獄舎よ入る魚支へて道下
とて大納言ハすくよと集積なる事
物とれたるやふ大倉よりとらよとて

許とわうする事と成親の乃とい
ふこととていふに
目より一とて目九日より本位より後
一とて中納言よ成親の六月又日未の
と意して檢知遠使別高よなりたるは
目書母や記さうえ後去承安二の七月九
一日候二位一候母もすなりとて意す
めえ所きす事といふ人かたなりと

く交遊雅ハ法花志人ありしふこころ
しむいし石段なりし事也この二條殿と遊
を此賞なりし御修造志目也因てこの四月十
二日よ又正二位に後ら度お中御門中納
言宗家下こころ執行きし御承安元年十
一月九日才二中納言と詔く権大納言小
わらりておさうよ後醍醐帝に礼多れ人嘲く
山門志大座よハ乃らりる人ありきもの成

とて中なるふれことそのらにやいし事
及先を君なるゆふくおさうく御神の志討
も人志志あうもと記もわらりてと記もわら
不同も也

この目いしおわらは記よ京より御修造あり
とていしお記よりすてようくあしあや
守り守りハ御志志くふへといひく船を
すくふりしお記内大座のものとら記又

わりけらるゝ元山里をふと元もくんと毎
こ中つ道ともわたりぬくしそ世よわぬぬ
ひらひもよしあつくも母中わらふいれく
くハ親あもさ元くらく後ととあすあ
うるくと天たかもいりり中くつふあさう
あつあつかつは海一くあひくともあひひ
りす津あひりあ中うあもくはうはひぬ
くああ一ああははくあく入海津うああ

事あやとそあくそあ海く志はよう
いこまくとあああくくあああん
んあああああくくああわああ一こ
かろふああああああああああああ
一ああああああああああああああ
治られうりああ大納言ああああああ
あああああああああああああああ
あああああああああああああああ

能んてふひ物へ海く妻子とらん亦も
わあささ一色山は六花乃そせうり
よそ目古七社志御こりなき胡家
志御人すよ如くわいさりわらさ
あせぬ七条よ又目しそわらさ
も此許さふわりた乞ハ志志はい御免
けもわらす大花の折あもあさ
つるもやあて夫よわりた地よぬ

かめ記さういふ人よ急いさ
うめくゆふれハ船をきし物
れうわし船志里いく回のおさ
も月此関船志う船つさひも
あせらるいらん能ん此方
と残成志志みさるも
中しおの志と爰乃こりらす我九志
能ん大助神と敬し

たり又十よ及ましくこころうとんこふと
今よかえりすいれりをもん事も今は
りありきしらく松をそりてはり城
りしと掃く自米少く大明神よ願書ま
いけ務らるる事云

敬白信長大明神御寶前立願事

一可也唱毎日千返本地主号事

一可也唱毎日千返玄珠御名事

一可也納主代御叙事

右甄録山新又山郷向鷓鴣之小属秋而守
翦還極花之根運去而忽開再舍正期志永
別也男女子是尚在花格九重内成經不生
之伸力嫡子錠志不後在育此係則歎矣
焼而罪信也曾火煖新悲涙落而ふ似眼
下灑雨作乾大明神情無二丹誠令納主心
伸之致成經以下男女令与平本給也仍立

於此件

治承二年六月二日

成親敬白

中書省之御波次第は治られざる是行祝
と申す太刀門脇宰相志りて小わり世れを
治之は於此とてふおあすすまじし路中
御をよ治付する御志とてく乞をまじし次
行現ハ神叙とてく莫花才一志に主莫と
うすういよ志世すてよわりまよふい

乃りハるあうも山やいおるあまにけふ
もけ大御言ハ業因つるさうりける小倉六
取志つらやありいようう鶴まてくあさい場
能れ行ハ於お将ハあ一也う祝と二一い
殿上よ昇らま一し事わりくるるうと
やり也事成親志祈叶ハるん治以念座
生念生ふ念以父母念子子不念父母と
ておのら志子をうすいよ親志と一い

夕ハ夜ヨト申んとのこころいひあり行ひ
くる路ありて心も一ふふハ涙をぬきありよ
物くわそい行る程々具志あこさみさまへ
ハ悔士れいより火いく程とこをくみられ
ん大納言思つてさうく

大海ふらうの船れきゆをさふ塵をふるわす
とらりさあくと先くとも死うむふ御心の
申さしそおとれぬえくわん終あり

大納言父子ゆとく思ふすいま一先死う
んが身くわり死に入道蓮澤とハ去地
次良わ月うくひさち志とよハはり守新
平判友資行とハ源冬文判友飲く作渡
志玉ハはりつとぶ一ち志ちりく子をば
を治らむ縁まこと飲く後志宿下よい
あそく平判友康頼は脂守れ一ゆさう志
ゆんともんとうはとハ後申ふれちう人瑞

のどろそふ道やと流く後原よりしる
丹波が将てハきうと此平宰相よわのりま
死る。

お賀も姫高被討事

西光おちやとく子お乃わおちきりりき同
やていえりの耐りりを右邊の耐姫原等
追討とく交りし大政入道下かきし
くしと武士かりりれふのいお井も田

へくつりて何りりとうしわくおそとせん
わのりく酒のさきく姫高とあひし
ておうへをを孫を交りしとさくくさり
けのほやよ又日りりきり母をりしりり使
という兒くくしけるハ入道後ハあハ
條よりきりしそれきりしおちきりり
河原よりしる孫はさこのんすんし
おちよやそその夕よさうしり行也かりり

つらくな意はのりす人——初志うらぶくわ
ある身——とのこまひもれん宰相わぶれく
こまひのゆる事ある人——一度こころせ
てこまひこころせとわゆる目数も愈こころは
うらこころせと思ひ申すくわゆる——母や
もあくとあ——うらと二度抱かひぬらぬ
とあ——うらとあわゆるとあ——思ふ申すれは
こころせとあわゆるとあわゆるとあわゆる

後こころせとあわゆるとあわゆるとあわゆる
あわゆるとあわゆるとあわゆるとあわゆる
あわゆるとあわゆるとあわゆるとあわゆる
えこころせとあわゆるとあわゆるとあわゆる
う思わぬ思ふする前へ後——とあわゆる
のうらとあわゆるとあわゆるとあわゆる
んせとあわゆるとあわゆるとあわゆる
ゆとあわゆるとあわゆるとあわゆる

へも乃こまへにあそぶふとすふふふ
さるしうもさき父志御へほせんわさ
うあつ死こまふういよせし死をみてあ
も六条のしうまらひく夢をかまたあ
死さるひ行ふれんあそぶあまふ
か海一なるの秋の鳥羽まてとくいれ
まへん宰相のあつら後うあれと意せ
う死れくれいよとくいよあふいほ

ぬよはぢうとあそぶこまふふとすふ
く。

水口

